

便所の神様 90
歪み観音 88
見世物姥 79
もくちゃん 85
シリミズさん 85
杜鵑乃湯 66
けしに坂 66
むかし塚 64

ごろごろと雲が涌く。

空は藍色、そして玄。黄昏も過ぎ帳が降りる、夕と夜との間くらいです。雲の境界が白く輝く。背後に太陰が居るからです。

嗚呼、澄んでいるのか煤けているのか判らない。逆も半端な彩であることよ。昏いのか明いのか判らない、何とも半端な空であることよ。

婆ちゃんが哭いてばかりいるので、煩瑣くて僕は玄関から出たのです。がらがらからと戸を開けて、下水の上に架かっている色の抜けた板の上に立ったのです。

そこで夜天を仰いだのです。

もう少し暗くならなければ星は能く見えません。

今日はやけに月が輝いているから。でも星が視たい訳じゃない。あの粒粒した天蓋の滲んだ孔を凝眸している、何だか己がちっほけでちっほけ過ぎて哀しくなってしまうからです。うんと遠くへすっ飛んで行きたくなってしまふからです。

電信柱が黒黒と屹たつていて、吊り橋のように撓たわんだ電線が何本も何本も数えられない程に延びていて、それが集まった辺りに熟れた鬼燈おにさまみたいな外燈が、ぼわん、ぼわん、と浮かんでおります。

向かいの家はもう真つ黒で、屋根の瓦かわらだけが少し月明かりを照り返し、奇妙な模様を作っています。まるで長虫へびの鱗うろこのようです。

この。

玄関から道路まで、下水を跨またいで渡してある短い板の下に。

昔、蛇が居たことがあった。縞しまのある短い蛇で、父さんが捕まえて殺した。気持ち悪かったけど、面白かった。面白かったけど、鬼魅きみが悪かった。楽しいことと怖いことは、そんなに違いがありません。昔といつても去年だったか。一昨年おととしだったか。

此処ここだよな。

今度は下を見たのです。

地面はてらてらしていました。

下水の溝はもつとてらてらしていました。汚い水が流れているのでしよう。下水の溝の両脇には、何だか判らない靄もやもや霧きりがあつて、それはきつと昼間見れば叢くさむらなんだと思います。今は暗いので何だか判らないものなのです。

一本だけひよろりと長い草があつて、それだけは草だと判ります。

〇〇八

〇〇九

足許あしもとの板は、何だか白茶けていて、全体の昏さからは浮き上がっています。汚い板は乾燥かんばせしていて、がさがさしていて、土埃ちぼろりやら砂すなやら塵芥ごみやらが付いていて、しつとりと湿つたような夕ゆふと夜の狭間の景色の中にあつては、何だか異質なものでした。それこそその筈で、家の玄関燈が、僕の頭越しに板を照らしているからです。

月の光を嫌っているのです。

だからがさがさしているのさ。

てらてらしない理由です。

電気は波長が合いません。もの凄く近くで観たテレビみたいで。

昼間はこんなことがないのになあ。太陽というのは、それは強いものなのだなあ。

僕はそう思います。あの蛇も、太陽が強過ぎて厭いやになったのかもしれないぞ。そうでなければこんな汚い下水の溝の、白茶けた板の下なんか居ないだろうに。

父さんが殺した。

アア、アア、と声が出ます。

犬のようです。犬のようですが、あれは婆ちゃんです。来る日も来る日も陽が暮れると泣く。声を出して。涙はあまり出ないけれど、それはもう泣く。

哀しいのです。

でも、煩うるさ瑣まい。

何だか淋しくなりました。

もう寝ればいいのになあと思っています。婆ちゃんは、茶の間の長椅子に座ったきりて一日過ぎして、そしてたつぷり泣いて、寝るだけです。朝になると、それは早く起きて、仏壇のある部屋でお経を上げます。お経は、下手です。お坊さんのようにには詠めません。何を言っているのか解らないし、声も穢い。調子も外れています。

だから目を覚ますと、いつもその、鴛鳥みたいなお経の音が聞こえています。それはそんなに煩瑣くない。

あんなに一所懸命祈っているのに、夜になると哀しくなるんでしょう。それならお経なんか上げなければいいのにと、僕は毎日思っています。声が洩れてます。響くけれども延び代のない掠れ声です。婆ちゃんは外に出ないので、電気の波長ですっかり乾いているのかもしれない。髪の毛は膏を付けて撫で付けているけれど、皮膚はかさかさです。

しつとりとした月明かりの景色を覗いていると、そんな気持ちになつて来ます。

それにしても煩瑣い。

雲が切れて、皓皓と月輪が照り始めたというのに。何がそんなに哀しいんだろう。

僕は、これ以上夜気に晒されていると心が凍えそうになる気がしたので、道路に背を向けて玄関に向き直り、がらがらと戸を開けて三和土に踏み込みます。

家の裡は朦朧としています。

硝子戸越しに茶の間の様子が窺えますが、硝子にはガチャガチャした模様が刻まれているので、やっぱり朦朧としています。輪郭が暈けた色の塊です。婆ちゃんも壁も長椅子もテーブルもテーブルの上の湯呑みや果物も、みんな輪郭が少しずつ混じり合った、色の塊です。テレビ画面だけがひかひか点滅するように動いています。

電気だから。そういう訳かテレビの音量はいつも低くって、聞こえ難いのです。

婆ちゃんの泣き声の方がずっと大きい。

家の裡は、少し臭い匂いがします。

家の匂いです。下駄箱の上にはレースの敷物が敷いてあつて、毛糸で編んだチョッキを着たキューピー人形と、貝殻で作った狸の置物が置いてあります。狸は、左目の処が壊れて取れてしまっているので、捨てればいいのに捨てればいいのにと、見る度に思うのです。こんなもの友達が見たら、必ず莫迦にされてしまうから。

友達は気が付かないのだけれど。

家の変な匂いは、きつとキューピーのチョッキにも染み付いています。

チョッキは元元ピンクで、縁は黄色だったのに、もう何だかベージュみたいな色になっていきます。退色してから、変な空気で染められたのです。そうなのです。

だから、この毛糸のチョッキは、きつとももの凄く臭いんだと思う。

家の匂いが編み目の間や繊維の隙間にたつぷり染み込んでいるに違いありません。だって何年置きつ放しになっているか判らないんだもの。誰が編んだのか知れないんだもの。

飾らなきやいのに。

そもそも、うちは臭いから友達を呼ぶのが厭なんだ。

友達が来てもいつも外で遊ぶ。家には上げない。

僕の部屋は三畳間で小さいし、部屋というより部屋と部屋の途中だから。

この匂いは何の匂いなんだろう。臭いけど、僕はほんとうは、そんなに嫌いではありません。ずっとこの匂いを吸って生きているからでしょうか。この変な空気を呑み込んで育ったからでしょうか。すっかり慣れてしまったのでしょうか。

でも、外の透き通った空気の方が気持ちが良いのです。鼻から頭の方に抜ける。すうっとするから。

家の裡なかの空気は、鼻から吸うとじわじわと体に染み込むような気がするのです。落ち着くけれど、ちっともスツキリはしません。

古いからかなあ。

汚いからかなあ。

木造の平屋です。

二階建ての友達の家は新しくて恰好かっこうがよいです。団地もアパートも恰好かっこうがよいです。うちは何だかお寺みたいな色だから。床にビニールの敷物ひきものどかが鉸びょうで止めてあったりするし。壁に立山たてやまのペナントどか貼はつてあるし。外壁も板だし。トタンどかが錆びてるし。

だから匂うんですきつこ。

何の匂いなんでしょう。

仏壇のある部屋は、線香の匂いがします。蠟燭ろうそくが焦げた匂いもします。

簞笥たすがある部屋は、樟腦しょうのうの匂いがします。紙かみみたいな匂いもします。

風呂場は石鹼せっけんと黴かびの匂い。台所は水垢みなかど、野菜に付いた土の匂い。

茶の間は、婆おばちゃんちゃんの匂いです。年寄りの匂いがします。それから、ご飯の匂いもします。味噌みそや醤油しょうゆではなくて、炊いたお米の匂いです。

そういう色んな匂いが混じり合っているのかもしれない。

混じり合うと臭い。学校や街にはそんな匂いはしない。線香や樟腦しょうのうや黴かびや土や年寄りの匂いはしない。それはどれも家の中だけでする匂いで、それが溶け合って混じり合って、模様のある硝子戸越しの景色みたいに境目がなくなって、それがうちの匂いなのか。

多分うちの匂いなのでしょう。

恥ずかしいです。

でも、嫌いな訳ではありません。臭いよ臭いようちの匂いだよと思うと、恥ずかしいけれどほっとします。

体の芯まで行き渡っているのですか、僕の。肺とか心臓とか。細胞のひとつひとつや血管の中にも。

キューピーのチョッキみたいに。

僕も臭いのかな。

謂われたことはありません。みんな黙っているだけですか。

父さんの、もう履かなくなつた茶色のサンダルを脱いで、框に上がります。足の裏がぼこぼこした框の木目に載つて、気持ちが良いです。

木は冷えていても少し暖かい。

茶の間に行くとき婆ちゃんが煩瑣いので、そのまま廊下の方に行きます。

廊下の床板はぼこぼこしていなくて、つるつるです。艶があつて、電燈を照り返しています。磨いているのです。もう居なくなつた、家族達が磨いたのです。それは丹精込めて磨いたのでしょう。餡色の透明な膜を張つたみたいに艶があります。

裸足であるけど、べたべたと足跡が付きます。

障子が見えるど仏壇の部屋です。

誰も居ないのできつと中は真つ暗です。障子は、もう張つた障子紙が古くなつていて、全体に灰色っぽくて、紙の目も粗い感じです。障子を破くと叱られますが、でも破きたくなる時があるのです。一箇所破くと、もう歯止めが利かなくなる感じです。

だから、前を横切る時は余り見ないように心掛けます。

線香臭い。

まだ婆ちゃん泣いている。もう寝ればいいのに。

それとも犬かな。犬かもしれない。救急車が走るとあうあうと近所の犬が啼くのです。婆ちゃんの声も同じような声音です。犬が何ものかに押し潰されたような声なのです。

廊下を進むと家は段段暗く暗くなって来ます。

奥の方は真つ暗で、玄関や茶の間に近い方は明るいです。

線香臭い仏壇の部屋の前辺りの廊下が、だから家の中の誰彼刻です。

僕はそこを通り越します。雨戸が閉まつた硝子戸に僕の姿が映ります。でも、その姿もすぐに真つ黒の無限に融けて、ひよろひよろした弱弱い輪郭だけのお化けみたいになつてしまいます。

燈を点けねばなりません。

尤も、こちらの方に用はないのです。

でも、僕の狭い部屋に行くには年寄り臭い茶の間を抜かなければならず、婆ちゃん
は犬みたいに煩瑣わづらわいので、迎むかも厭いとなのです。今日の僕は厭いとなのです。何だか、胸に何
かが悶もえているのです。あの声が、別に嫌いではないごうのうに、聞きたくないので
す。

だから燈を点けねばな。

そこは板間のようになっているのです。

でも部屋というより廊下の行き詰まりで、その先には黴臭いお風呂があります。

それから裏口があります。勝手口ではなくて裏口です。だってそこから外に出たつ
て、板の塀があるだけで、そこは狭くて、しかも毒毒しい色の、緑っぽくない草が茫ぼう
茫ぼう生はえているだけなのです。

その、草の生えた塀との隙間を通って家の横に出たって、犬走りは犬も通れないく
らいに狭いのですし、また庭の方に出たごしたって、まるでただの空き地のような狭
い荒地があるだけで、そこには生乾きの洗濯物が干されていたり、盥たらいの残骸ざんがいが落ち
ていたりするだけなのです。裏口から出ても家の前の露地に出ることは出来ない
のです。

御用聞きなんか入って来られないですよ。

ものの出し入れだって出来ないですよ。

戸を開けたって、裏に出るだけです。だから裏口なのです。その使い道のない裏口
のそばに、旧式の洗濯機があるのです。その横の籠かごには湿った汚れ物が山のように溜
まっている筈です。

昼間の天気が良いから洗濯が出来ないのだな。

真まつ暗くで見えないけれど、この闇の中に汚れた衣類が、汗や垢のついた服なんか
あるんだらうなど、僕は予測しました。匂においがした訳ではないのですけれど。

兎うさぎに角かく真まつ暗くです。

手探りでしよう。

スイッチは。

お便所の戸の横です。

真まん中に、お便所があるんです。だから、何だか、洗濯物や裏口やお風呂場の匂にお
いは全部負おけてしまいます。暗くがりりで判わかるのは、そこにお便所があることだけで
す。

早く燈を点けなければ。

この闇は、お便所に占領せんりやうされてしまいます。だって、匂においがしますよ。

先まずは、消毒薬の匂においです。

刺激臭しききゆうなのです、最初に香かるのは。

お手洗いの水に入っているんです。消毒薬が。

微生物や、細菌や、そういうものを殺すためでしょう。水道から水を汲んで、わざわざ上から吊るしたタンクみたいなものに溜め置きして、それで手を洗うんです。

吊り下げられた変な形の器具の先を手で押すと、ちゅ、ちゅ、と水が出る仕組みです。あんまりじゃあじゃあ出ません。それで手を湿らせて、横に下った手拭きタオルで拭くのですが、擦り付けるみたいになります。きつどあの手拭きタオルは、もの凄く不潔なんです。取り替えたって洗濯したって、きつど不潔です。

だから台所まで行ってもう一度洗ったり、昼間なら外に出て、井戸のポンプで洗い直したりもします。

だつてきつと汚いぞ。

消毒したつて汚いよ。

タンクに注ぐのでしよう。毒を殺す毒の薬を。

だから、ちよつと病院みたいな匂いがします。病院みたいな白くて平べつたい洗面器のようなものも置いてあるのです。黒い鉄の棒で出来た、弱つちい櫓やぐらみたいな台に乗つかっています。それは、でも空なんです。埃が溜まつているんです。こびり付いているのです。片付ければいいのに。

がちやん、と足がぶつかります。

洗面器を乗せた台の脚にぶつかったのでしよう。

それならスイッチはすぐそこです。手を伸ばして。

便所の戸の横まで手を伸ばして。

ごつごつしたプラスチックの突起が二つ。上の方です。

ぱちり。

天井の方に、暖かいのか冷たいのか判らない、しかも歪いびつに進む微弱な電気が出来た光の球が瞬またたいて、卵を割つたみたいにざろんど闇を押し遣ります。

闇は裏口の方とか、風呂場の方とかに追い遣られることになるでしょう。

でも眩まぶしくなつたという程明るくはなりません。目が慣れない程の変化はありません。ものが見えるようになるだけで、そこはまだまだ昏いでしょう。

夢くらいなあ。夢みたいだ。

明るい部屋で観たモノクロ映画みたいに薄ぼんやりとしています。

お便所の前ですから。ああ、お便所の扉が能く見える。そうすると、もう消毒液の清潔にみせかけた嘘臭うそくさい刺激臭しきげくさは薄れて来ます。いや、同じように香っているのですが、お便所の臭においが勝つのです。混じつて変な匂においです。もう、うちの匂においじゃない。

臭くさい。